欺瞞の果てのひまわり

津久井　瑠音

*作品の著作権は作者に帰属します。
無断の上演・掲載・引用・配布等は固くお断り申し上げます。
*今後の改稿を目指す進行中の戯曲であることをご了解のうえお読みください。

欺瞞の果てのひまわり

津久井　瑠音

あらすじ

画家の夢を諦めた志村涼子。
長年、制作活動を優先してきたため職歴はアルバイトばかり。再就職に挑むも、不採用通知ばかりが積み重なっていく。
そんな折、かつて9か月だけ働いたコールセンターの求人を見つけ、最後の望みをかけて応募を決意する。しかし、“1年・正社員勤務”と履歴書に嘘を記して――。

だが、嘘を抱えていたのは彼女だけではなかった。新たな職場で数々の欺瞞を目撃する。「再スタート」を願って足を踏み入れた場所で、志村が最後に選んだ行動は、誰も予想しなかったものだった。

【登場人物】

・小幡千尋（おばた　ちひろ）　・・・３０歳。面接官

・志村涼子（しむら　りょうこ）・・・２９歳。画家の夢をあきらめ、仕事を探している。

・神田伸大（かんだ　のぶひろ）　・・・４５歳。小幡の直属の上司。

・佐伯一（さえき　はじめ）　・・・３０歳。志村と同じ求職者。

【台本上での記号のルール】

（ＡＡＡ）・・・人物の動きを示している

〈ＡＡＡ〉・・・次の人物のセリフに遮られる、前の人物のセリフをさえぎって喋る場合を示している

［ＡＡＡ］・・・人物が省略した言葉を示している。

【舞台】

舞台はある企業の小会議室。
舞台中央に、大型の長方形のテーブルが配置されている。四人が作業できる程度の大きさ。
テーブルの周りには、上手下手に二つずつ椅子が配置されている。テーブルの中央には固定電話が配置されており、内線で上階のオフィスにいる社員との連絡ができる。
舞台奥中央にホワイトボードが配置されている。
下手奥側に、ドアがあり、エレベーターホール・トイレへと通じている。この会議室の唯一の出入り口である。
舞台前面上手に、窓がある。

【一場】

2025年5月23日金曜日午前十一過ぎ。
会議室には二名の人物がいる。
下手側の椅子に着席しているのは面接官である小幡千尋。
上手側の椅子に着席しているのは、求職者である志村涼子。

上手側の志村が着席していない椅子には、求職者の佐伯一の荷物が置かれている。
面接前の会社概要の説明を小幡が行っている。手元には会社の冊子。

小幡「以上で、会社概要の説明は終わりかな。」
志村「ありがとうございます。」
小幡「で、このあと担当者が来て、応募条件の確認をして、面接という流れね。」
志村「はい。」
小幡「なんだけど、担当者がまだきてなくて。」
志村「ああ、はい。」
小幡「先に、履歴書もらっちゃおうかな。」
志村「あ、わかりました。」

志村、カバンの中の履歴書を探す。
鞄から取り出し、小幡に渡そうとするところで手が止まる。

小幡「志村さん？　大丈夫？」
志村「・・・手が固まってしまいまして。」
小幡「え？　手が固まる？　それ大丈夫なの？」
志村「あ、はい。すいません。今動きました。」

手を動かして、小幡に履歴書を渡そうとする。
寸でのところで、内線が鳴る。

小幡「ああ、ごめん。(内線に出る)はい、小幡です。え？いやいや、それ話が違うじゃないですか？　無理って。・・・いやいや。」
志村「・・・・」
小幡「ちょっと待ってくださいよ。いや、行きますから。そっち。(内線を切る)志村さん、ごめん。ちょっと待っててくれる？」

志村「あ、はい。」
小幡「その冊子の裏に今回の業務条件載ってるから、見といてくれる？」
志村「はい。」

小幡、下手より退場。
志村、今渡そうとした履歴書を見つめる。
ため息をつく。
その後、カバンからもう一枚の履歴書を出して、見比べる。
葛藤したのち、最初に渡そうとした履歴書を鞄にしまい、新しく出した履歴書を机に残す。
後ろめたいことがあるのか、胸に手をやり呼吸を整える。
気を取り直して、冊子の裏の業務条件を確認する。

志村「・・・？」

志村、スマホを取り出して応募時にみた勤務条件を確認する。

スマホと冊子を何度も見比べる。
勤務条件が求人サイトで見たものとは微妙に違うことに気が付く。
その瞬間、頭痛が襲う。

志村「いた・・・・」

志村、顔をしかめて頭を押さえる。
あまたを振りかぶって、頭痛を抑える。
顔を手でたたき、気持ちを入れ替える。
佐伯一、下手より入場。
志村、面接官が来たと思って、立ち上がる。

佐伯「あれ？」
志村「なんだ、あなたか。」
佐伯「誰か来たんですか？」

志村「ああ、社員の人が。今説明うけてたとこ。」
佐伯「ええ？　僕いないのに？」
志村「勝手に出てっちゃうからでしょ？」
佐伯「しょうがないじゃないですか。結構待たされたんだから。トイレ我慢できなくなっても。」

志村、席に着く。
佐伯、自身の荷物がある席に向かう。
佐伯、志村の履歴書を見る。

佐伯「結局そっちにしたんですね。」
志村「いいでしょ。」
佐伯「いいんですよ、みんなやってるんですから。」
志村「(佐伯の軽薄さにため息をつく)・・・あ、それより、これ見てくれる？(求人条件を見せる。)」

佐伯「なんですか？」
志村「これさ、〈募集のやつと違うよね？〉」

志村のセリフが言い終わる前に、小幡が下手より入場。

小幡「お待たせー。あ、佐伯さんですね。」
佐伯「はい。」
小幡「お待たせして申し訳ありませんでした。」
佐伯「いえ。」
小幡「佐伯さんは、別室で面接を行いますので荷物まとめてもらえます？」
佐伯「はい。」

佐伯、荷物をまとめる。
下手より、神田が入ってくる。

神田「失礼します。」
小幡「佐伯さん、(神田の方に手をかざして)面接を担当する神田です。」
佐伯「はい。あれ？」
神田「あ。」

佐伯と神田、お互いに見つめあう。
小幡、二人の顔を交互に見る。

小幡「神田さん？」
神田「ああ、ごめんごめん。神田伸大と申します。面接を担当させていただきます。」
佐伯「はい、佐伯一と申します。よろしくお願いします。」
神田「では、行きましょうか。」
佐伯「はい。」

神田と佐伯、下手より退場。

小幡「で、志村さんの面接なんだけど私がやることになったから。」
志村「あ、そうなんですか。」
小幡「不本意だけどね。」
志村「ああ。(なんと言っていいのかわからず、あいまいなリアクション。)」
小幡「じゃあ、履歴書もらっていい？」
志村「はい。」

志村、履歴書を小幡に渡す。

小幡「ありがとう。(ざっと目を通して)じゃあ、面接始めるね。」
志村「はい。」
小幡「・・・まず確認したいのは、(履歴書の勤務希望の欄を見ながら、)週五勤務で

いいのかな？」

志村「はい。週５勤務を希望しております。」

小幡「いいね。勤務時間はどれくらいが希望？」

志村「そうですね。フルタイムで考えております。」

小幡「ほんと！　助かるわー。それ。希望の曜日とかある？」

志村「はい。金土日月火、で週五を。」

小幡「それ、最高！」

志村「はい？」

小幡「金土日が、人がいないのよ。いや、ものすごい助かる。それ。」

志村「あ、ありがとうございます。」

小幡「志村さん、コールセンターの経験は？」

志村「あります。」

小幡「はい、ありがとう。えと、コールセンターはこの会社かな(指で指して)？」

志村「そうですね。」

小幡「こちらは正社員で一年間勤務していたということで、間違いない？」

志村「・・・・」
小幡「ん？」
志村「はい、間違いないです。」
小幡「それは、心強いね。ちなみに、具体的な業務内容は(志村が顔をゆがめていることに気付き)・・・志村さん？」
志村「(頭痛が襲う)・・・・」
小幡「大丈夫？」
志村「あ、すいません。最近、風邪をひいて。もう治ったんですけど。頭痛だけまだ残ってて。」
小幡「そうなの？え、面接続けられる？」
志村「あ、それは大丈夫です。ものすごい痛いわけではないので。」
小幡「そっか。無理しないでね。」
志村「ありがとうございます。」
小幡「あ、で、具体的な業務内容は？」
志村「あ、はい。そちらの会社では、健康食品の受注窓口の電話業務をやっておりました。」

小幡「うんうん。今回の業務と近くていいね。」
志村「そうですね。」
小幡「正社員で働いてたからあると思うんだけど、リーダー業務やSVなどは経験してる？」
志村「・・・・リーダー業務はあります。」
小幡「ほんと？　いやめちゃくちゃいい。あ、ていうのもね。うち今回、オペレーターで募集してるけど、ゆくゆくはリーダー業務を担う人を探してたのよ。」
志村「あ、そうなんですね」
小幡「うん。志村さん、しっかり経験があるので期待の星だわ。」
志村「ありがとうございます。」
小幡「(履歴書に目を通して)あーでも、気になるのは、一年でコールセンターの仕事をやめてるのと、以降の仕事はすべてアルバイト、だよね？」
志村「そうですね。」
小幡「ふむふむ。まあそのあたりも含めて、今回応募してきた理由を聞かせてもらえるかな？」
志村「あ、はい。・・・・私は再スタートを切るために御社を志望しております。」

小幡「再スタート？」
志村「はい。一年でコールセンターの仕事をやめたのは、就職であきらめた画家の夢をかなえるためです。」
小幡「画家［を］目指してたんだ。」
志村「はい。そのため、時間の融通がつくアルバイトを選択しておりました。」
小幡「ふーん。今回の雇用形態もアルバイトだけど、まだ画家の夢を追いかけてる感じ？」
志村「いえ。それはもう。挑戦できることは挑戦したので、再スタートを切りたくて、御社で働きたいと思っております。」
小幡「あれかな？　正社員登用制度を見た感じかな？」
志村「あ、そうですね。まずはアルバイトから経験を積んで、いずれは正社員を目指したいと思っております。」
小幡「うん。うちは大歓迎だし、アルバイトで入って、の人も多いから。」
志村「はい。」
小幡「後聞きたいのはね、・・・志村さんからなにか聞きたいことある？」
志村「あ、そうですね。これなんですけど。（先ほどの冊子を小幡の前に出す。）」

小幡「はいはい。」
志村「この労働条件なんですけど、これは間違いですよね？」
小幡「え？」
志村「はい。これ、七時から十六時で実働八時間って書いてあるんですけど、求人のあれで見たときは、九時から十八時って書いてあったと思うんですけど。これは？」
小幡「あー、それね。」
志村「はい。」
小幡「あー、そうだね。そうなんだよ。そうなの。」
志村「え？」
小幡「あ、え、ごめんなさいね。あの、うん。ごめんなさい。志村さんがみた求人サイトの時間が、たぶんだけど前に募集してた時のままになっちゃってるのかも。」
志村「ええ？」
小幡「あー、そうだよね。ごめんなさいね。あの、うん。だから、今回募集してるのは七時から十六時で、実働八時間。九時から十八時は、もう今埋まっちゃって

て。」
志村「あー、そうなんですね。」
小幡「ごめんなさいね。うっかりしてた。ごめんなさい、本当に。その時間でも大丈夫？」
志村「あー、まあ、はい。朝は得意なんで。」
小幡「ほんと。ありがとう。じゃあ、次の〈質問に移ろうかな。〉」
志村「〈遮って〉もう一個いいですか？」
小幡「なに？」
志村「仕事内容なんですけど。求人サイトで拝見した時は、化粧品の受注窓口の業務と書いてあったと思うんです。」
小幡「うん」
志村「でも、この資料には、受注窓口、カスタマーサービス、忘れ物センターって。ええ？　これは、私に関係ない業務ですか？」
小幡「あー。いや。そうなのよ。」
志村「はい？」
小幡「受注窓口を経験してもらって、それをマスターしてもらったら、他の案件も担

当してもらうことになるの。」

志村「他の案件？」

小幡「そうなの。いろんなクライアントがいるから、いろんな案件があるのよ。」

志村「あー、一個の電話業務だけじゃないってことですね。」

小幡「そうそう。で、全部受けれるようになったら、時給一五〇〇円になるの。」

志村「ええ？　全部受けれるようになったら？」

小幡「うん、そう。なんか、おかしい？」

志村「え、だって、求人サイトでは、研修中の二か月は時給一二〇〇円で、研修が終わったら一五〇〇円って。ええ？」

小幡「あ、えと、そうかな。そんな、研修二か月、なんて書いてあった？　それはないと思うんだけど。」

志村「いや、書いてはないですけど。研修中、時給一二〇〇円、かっこ二か月、って書いてあったと思うんですけど。」

小幡「あー、なるほどね。それ、みんな結構勘違いするのよね。」

志村「勘違い？」

小幡「えとね、時給一二〇〇円かっこ二か月、じゃなくて、かっこ二か月びよよーん

(手で～を描く。)、だから。」

志村「え？　なんですか、びよよーんって。」

小幡「これ、これ、(～)。何々から、かな。」

志村「・・・あ、～ってことですね。」

小幡「そうそう。だから、二か月から、二か月じゃなくて、最低二か月かかりますよって意味なんだけど。」

志村「えー、あ。そうなんだ。」

小幡「そうだよね。そうそう、それも直そうと思ってたんだけどね。ごめんなさいね。」

志村「あー、はい。」

小幡「大丈夫？」

志村「まあ、あの、大丈夫です。」

小幡「ごめんね、なんかだましたみたいになっちゃって。」

志村「・・・・・」

小幡「よし、じゃあ、はい。続けるね。後確認しておきたいのは、(履歴書を見て)ここに書いてある住所は実家かな？」

志村「いえ、その住所は今住んでるところで、実家は群馬です。」
小幡「あ、え、群馬？」
志村「はい？」
小幡「私も、群馬出身。」
志村「あ、そうなんですか。」
小幡「え、群馬のどの辺？」
志村「私は、群馬の太田市〈なんですけど。〉」
小幡「〈遮って〉え、私も太田なんだけど。」
志村「あ、本当ですか？」
小幡「えーなんか、親近感。」
志村「そうですね。私、学校で言ったら木崎中で。」
小幡「ええ！・・・私、綿内。」
志村「え、綿内ですか？　隣町じゃないですか。すごい近いですね。」
小幡「ほんとだね。すごい、こんな近い人、初めて会ったよ。」
志村「私もです。」

小幡「え、志村さんって今、二十九？」
志村「はい。あ、でも来月で三〇です。」
小幡「え、じゃあ同い年じゃん。」
志村「え、94年生まれですか？」
小幡「うん、94年。」
志村「えー、じゃあ成人式って？」
小幡「エアリス。」
志村「ですよね。ええ、じゃあ、同じところで成人式もやったし、なんならすごい近いところで学生時代を過ごしてたんですね、私たち。」
小幡「ほんとだね。会ってないのかな？　昔実は、知り合いだったとかじゃないのかな。」
志村「えー、どうなんですかね。でも、その可能性全然ありますよね。」
小幡「え、塾とか行ってた？私、星野塾行ってたんだけど。」
志村「あー、私塾は、個人経営のとこ行ってたんですよ。友達とか、星野塾行ってましたけど。」
小幡「そっか。部活は？」

志村「私、吹奏楽やってました。」
小幡「ええ。じゃあさ、あれ分かる？　関根先生。」
志村「関根和美先生ですか？」
小幡「そうそう！」
志村「あの、三年からこっちきて顧問でしたよ、吹奏楽の。」
小幡「ええ、そうだよね。二年まで担任だったんだよね。関根先生。」
志村「ええ、ああ、そうなんだ。」
小幡「関根先生怖くない？」
志村「いや、怖いです、怖いです。なんか最初見た感じはすごい、優しそうな人だなって思ったんですけど、なんかぴーひゃらぴーひゃらって演奏してたら、いきなり、バン！！って、譜面台たたきつけて。」
小幡「はいはい。」
志村「なめてんのか！！って。もう、ほんとうに部員みんなでがん泣きしました。」
小幡「やるー。そういうことやるんだよね、あの人。」
志村「いや、もう超怖くて。それまでは、ゆるい感じの部活だったんですけど、超スパルタになっちゃって。引退まで超怖かったですよ。」

小幡「いや、鬼の関根って呼ばれてたからね。綿内では。」
志村「やっぱそうですよね」
小幡「いや、見た目が優しそうなんだよね。」
志村「はいはい」
小幡「だから、怒らない人だと思ったから、友達グループでふざけて、先生彼氏いるの？って聞いちゃって。」
志村「あー、もうやばいやばい。」
小幡「こんな感じで。先生、彼氏いるの？(顎に手をついて、ラフなスタイル。)」
志村「絶対やばい奴。」
小幡「で、次の瞬間。机が飛んだ。」
志村「やばい。(ツボに入って爆笑。)」
小幡「もう何がなんだかわかんなくて、机飛ぶし、目の前に鬼の形相で関根にらんでるし、もうトラウマ。」
志村「やばすぎでしょ。それ。」
小幡「ほんとやばい。」

志村「すいません。私、面接なのに、こんな話しちゃって。」
小幡「いいよいいよ。」
志村「すいません、言葉もすごい砕けちゃって。」
小幡「え本当に、全然気にしないでいいから。ていうか、同い年なんだから、全然ため口でいいよ、全然。」
志村「いやいや、それはさすがに。」
小幡「いや、もうぶっちゃけさ、同郷のよしみで言っちゃうけど、志村さんの条件はこちらの募集条件とマッチしてるし、経歴も申し分ないから、ほぼ採用！と、ここでは言えないけど。たぶんそういうことになるから。」
志村「ほんとですか。」
小幡「うん。ほんと。気にしないで。全然ため口でいいから。」
志村「え、うーん。じゃあ、本当？」
小幡「本当、本当。」
志村「あり、がとう。」
小幡「もう全然一緒に働きたいし、働いてもらいたいし、地元トークももっとしたいっていうか。」

志村「え、したい。私も。同い年の同郷って、東京じゃ全然会えないから。」
小幡「ね。なんなら、もう今から、飲みにでも行っちゃう？って感じ。」
志村「本当にね。」
小幡「まあでも、そうだな。こっちが確認したいことは聞けたかな、志村さんの方から、何かある？聞いておきたい事。」
志村「あー、そうだね。」
小幡「って言っても、さっきだいぶ聞いてもらっちゃったよね。」
志村「うん、そうだね。」
小幡「ごめんね。大分、求人の情報と違くて。」
志村「あー。ぶっちゃけ、驚いたけど。」
小幡「そうだよね。」
志村「あーでも、全然大丈夫というか、面接の段階でわかってよかったっていうか。」
小幡「気を使ってもらって。」
志村「いやいや、本当に。全然求人と違うのに何も言ってくれない企業とかもあるから、全然大丈夫。」

小幡「ありがと～。」
志村「いや、ほんとにあくどい派遣会社とか多いから。」
小幡「え、何それ。」
志村「え、いかにも、働きたいって思うような条件のせて、全部嘘なの。」
小幡「あー。」
志村「ほんとに、仕事探してる人の気持ちを利用してやってるというか、本当にあくどい企業だなって思うから。そういうことやってる派遣会社に比べたら。全然。」
小幡「ありがとう、本当。そこまで言ってくれて。」
志村「いや、全然、全然。」
小幡「・・・」
志村「どうしたの？」
小幡「ぶっちゃけ、ぶっちゃけね、聞きたいんだけど、もし、採用ってなったら、うちの会社の入社意志って固い？」
志村「あー、うん。まあ、そうだね。結構、求人見たときから、いいなって思ってたから。採用ってなったら、働きたいって思ってるよ。」
小幡「そっか・・・」

志村「?うん。」
小幡「・・・(決心をつけて)いや、ここだけの話、なんだけど。ほんとに、ここだけね。」
志村「うん。」
小幡「さっき、なんか、前の募集の時の情報が残ってて、みたいなこと言ったじゃない?」
志村「うん。言ってたね。」
小幡「実は、あれ確信犯なんだよね。」
志村「確信犯?」
小幡「うん。だから、やっぱり、正規の情報載せて募集かけても全然人が集まらないから。うん。」
志村「あー、え?そう、なんだ。」
小幡「うん。」
志村「えー、なんでぶっちゃけてくれたの?」
小幡「いやー。なんかちょっと悪いなって思って。なんか色々、励ましてもらったのに、私たちもやってること、志村さんが言うあくどい派遣会社と同じだなって

思って。」

志村「(つい、笑って)いや、全然、そんなのいいよ。なんとなく、わかってたし。そのあくどい派遣会社とは全然違うし、やってるレベルが。全然大丈夫だよ。」

小幡「本当？」

志村「ちゃんとネタ晴らししてくれたから、うん。」

小幡「本当にありがとう。」

小幡、頭を深々と下げる。

志村、その姿を見てある決意をする。

志村「小幡さん、顔上げて。私も言わないといけないことがある。」

小幡「え？」

志村、カバンからもう一枚履歴書を取り出して、小幡に渡す。

小幡「これは？」
志村「・・・・ごめんなさい。私も嘘ついてる。」
小幡「嘘？」
志村「その履歴書が本当の履歴書。」
小幡「え？」
志村「コールセンター、正社員で働いてたって言ったけど、アルバイトなの。あと、一年じゃなくて九か月。」
小幡「九か月？(履歴書を見比べる。)」
志村「リーダー経験もない。」
小幡「ない・・・・」
志村「その履歴書が私の本当の職歴。嘘ついてごめんなさい。」

志村、深々と頭を下げる。
小幡、履歴書から目を離さない。

長い間。
志村、「顔上げて。」という声かけがいつまでも来ないので、様子をうかがう。

志村「あれ？」
小幡「・・・・」
志村「大丈夫？」
小幡「嘘なの？」
志村「うん・・・」
小幡「へー・・・・」
志村「あ、でも、よくあることだよね？　こんなの。とんとん、とんとんだよね。これって。」
小幡「・・・・とんとん？」
志村「うん。」
小幡「とんとん、というか。・・・結構話変わってくるよね。それ。」

志村「え？」
小幡「・・・・・・」

小幡、難しい顔で履歴書を何度も見返す。

小幡「・・・今日はありがとうございました。面接はこれで以上です。」
志村「・・・・・」
小幡「合否については合格の場合のみ、ご連絡させていただきます。一週間以内には連絡しますので。合格の場合は。はい。」
志村「え、あの？」
小幡「はい。ありがとうございました。」
志村「・・・・え、終わりですか？」
小幡「はい。」
志村「・・・・・」

小幡「ありがとうございました。どうぞ、お気をつけて。」

志村、一応退出の意志を示すため、立ち上がる。

志村「・・・え、地元トークは？」
小幡「はい？」
志村「さっき飲みたい、って言ってたじゃないですか？」
小幡「あー・・・。(とってつけたような笑顔で)今度行きましょうね。」
志村「・・・・・」
小幡「では。」

小幡、出口の扉を開けて、退出を促す。
志村、促されるまま、出口の方へ。

小幡「ありがとうございました。」

志村、扉の前で、立ち止まり、

志村「・・・おかしくないですか？」

小幡「はい？」

志村「私は、確かに嘘をついてしまいました。けど、それで、急に。ええ？そんなガラッと態度変えて。あなた、機械なんですか？」

小幡「人間ですけど。」

志村「じゃあ、なんでそんながらっと態度が変えれるんですか？血が通ってないんですか？」

小幡「いや、嘘つかれてたなら、だいぶ話変わってきますから。」

志村「ちょっとの嘘じゃないですか！」

小幡「ちょっと？」

志村「ちょっと、でしょ？　一年と九か月なんて、そんな変わらないじゃないです

か？四捨五入したら一年じゃないですか！　たった、三か月ですよ。」

小幡「大分違いますよ？」

志村「違いませんよ。九か月働いたら、一年勤務したと言ってもいいって、街頭アンケート取ったら、はい、九割になると思いますよ。」

小幡「なんですか、それ。」

志村「ちょっとの嘘で、そんな態度変えるなんておかしいと思うんですけど。」

小幡「ちょっとって言いますけど、あなた、正社員で働いてたって言いましたよね？」

志村「あれは・・・」

小幡「言いましたよね？」

志村「あれは、言うつもりなかったんです。」

小幡「どういうこと？」

志村「それは・・だって、バイトしかしてないって言ったら、落とすでしょ？」

小幡「はあ？　何それ？」

志村「そうじゃない。いろんな会社に落とされたよ。バイトしかしてこなかったって私を見ない。そういう一面でしか見ない。」

小幡「あなた、甘ったれるのもいい加減にしなよ。リーダー経験ないのに、あるとも言ったよね。」
志村「あるって言ったほうが採用されるんだから、みんな言うでしょ。」
小幡「経歴詐称ですよ。志村さんが言ってること。それを認めてって言ってるんですよ。」
志村「そんな大げさな。」
小幡「事実ですよ。正直、経歴詐称するような人を雇えないでしょ。」
志村「・・・」
小幡「わかりました？　今日はお帰りください。採用の場合は後日こちらから、連絡しますので。採用の場合は。」
志村「・・・」
小幡「まだ、何か？」
志村「・・・そっちも嘘ついてますよね？」
小幡「・・・」
志村「確信犯だって、言いましたよね？　それは、どうなんですか？　正規の条件じゃ、募集が来ないから、嘘の情報を〈載せてるって言いましたよね？〉」

小幡「〈遮って〉嘘ではない。」

志村「嘘でしょ！　面接で謝ればいいってもんじゃないでしょ。こっちは、求人の条件だと思ってきてるのに、それって、私がやってることと同じじゃないですか？」

小幡「・・・・・」

志村「どうなんですか？」

小幡「こちらの場合は、嘘というより、盛ってる程度なので。」

志村「同じじゃないですか！私と。同じでしょ？　何が違うんですか。」

小幡「こちらとあなたの嘘じゃ、全然違います。」

志村「・・・・・」

小幡「お帰りください。」

小幡、再び退出を促す。

志村「人をだまして、平気なんですね。二度と太田のこと口にしないでください。太

田の恥さらしが！」

志村、帰ろうとする。
小幡、こらえようとするが、志村を引き留める。

小幡「どういう意味？　恥さらしって。」
志村「そのままの意味ですけど。人をだます活動、頑張ってください。」
小幡「騙してないんだけど。面接でちゃんと、説明するようにしてるし。」
志村「でも、ここに呼ぶまでにだましてるじゃないですか！」
小幡「あのさ、アルバイトしかしたことないから、わからないんだろうけどさ、私だって好きでやってるわけじゃないから。組織ってそういうものだから。」
志村「自分は悪くないと？」
小幡「そうじゃなくて、正論だけじゃやってけないってことだよ。正攻法でうまくいかないなら、手法を変えて、〈目的を達成するの！〉」
志村「〈遮って〉その手法がうその条件を載せるってことなんですね」

小幡「だから、嘘じゃないって。面接で説明してんだから、いいでしょ。種明かししてんだから。」
志村「すごい考えですね。求人サイトをみて、この条件で働きたいって思った人の気持ちを踏みにじることに、なんの疑問もわかないんですね。すごいと思います。」
小幡「なんなの、あなた。」
志村「本当に、地元かえってこないでください。」
小幡「なんで、あなたに決められなきゃなんないの？」
志村「だって、嘘つきにけがされたくないし、大体あなた鼻につくんですよね。」
小幡「は？」
志村「初対面で、いきなり、ため口で、関係ない地元の話をぺらぺらして。馬鹿にしてるんでしょ。私みたいな人種を下に見てるんでしょ！」
小幡「何？　その、うがった考え。私みたいな人種って何？」
志村「バイトしかしてこなかった人間のことだよ。嘘つかないといけない気持ちなんてわかんないでしょ。」
小幡「わからないね。これっぽちも。大体さ、あなたが嘘つくのは自分に自信がないからでしょ。そんなんじゃどこ行ってもやっていけないんだよ。」

志村「黙れ！　この、嘘つき女！」

小幡「こっちのセリフだから！　帰ってよ！　さっさと。もう、終わったの！　あなたが採用されることはもう、絶対にないの！　帰れ！！」

志村「帰りますよ！！　言われなくても！　（すごい勢いで、荷物をまとめる。）」

小幡「これ、忘れてますよ！（本当の履歴書を押し付けるように渡す。）」

志村「（ひったくるように受け取る。）あなたは、地獄に落ちます！！」

志村、勢いよく出ていく。
小幡、イライラした様子で片づけを始める。
小幡、嘘の履歴書を渡し忘れたことに気付き、怒り沸騰する。
小幡、椅子を持ち上げる。

小幡「地獄におち〈るかよ！！！〉」

と小幡が言い切る前に、神田が下手より入ってくる。
神田は椅子を持ち上げている小幡を見て固まる。

小幡「おち・・・おち・・・おっちら、おっちら。（ステップのようなものを踏む。）」
神田「小幡さん？」
小幡「あ、すいません。気分転換にヨガをやってました。」
神田「・・・・面接終わった？」
小幡「はい。」

神田、机に置いてある志村の嘘の履歴書を見る。

神田「あ、彼女コールセンター経験あるじゃん！　いいね。」
小幡「彼女はおそらく入社しないと思います。」
神田「え！　なんで？」

小幡「なんでもです！」
神田「・・・なんかあった？」
小幡「いえ、私タバコ吸ってきます。」
神田「おう。」

小幡、イライラしながら出ていく。
神田、首をかしげる。
神田、代わりに片付けをする。
暗転。

【二場】

２０２５年６月２日月曜日午前十一時過ぎ。
上手側の席に志村、下手側の席に小幡が着席している。
小幡が入社書類の説明をしている。

小幡「お二人とも、来週までに給与の振込に使用する口座のコピーを持ってきてください。」

佐伯「はい。」

志村「・・・・・」

小幡「志村さん、わかりました？」

志村「・・・・・(一生懸命、書類を見てるふり。)」

佐伯「(耳打ちするような手で)言われてますよ。(普通に大声。)」

志村「びっくりした。その手やるなら、[声]小さくしてよ。」

佐伯「すいません。」

志村「(書類に目を通したまま、)聞こえてるんで、次行ってください。」

小幡「(ため息をつく。)この後、実際に二人が勤務する十二階のセンターに〈お連れしたいと思います。〉」

神田が入ってくる。

神田「お疲れ様です。」
佐伯「神田さん。」
神田「お、佐伯君。きたね。」
佐伯「よろしくお願いします。」
神田「はい、今日からよろしくね。志村さんもよろしくね。」
志村「(思わず立ち上がって)あ、はい。よろしくお願いします。」
神田「志村さん、なんか緊張してる?」
志村「ちょっと。」
神田「いや、もうリラックスしてくれていいからね。現場の人もみんな優しい人ばっかだから。」
志村「ありがとうございます」
神田「ま、焦らずゆっくりね。」
小幡「(自分との対応の違いを釈然としない様子で見ている。)」
神田「あ、小幡さん。」
小幡「はい。」

神田「なんか現場バタバタしてて、一人ずつ連れてきてほしいって言われちゃって。」
小幡「あ、そうなんですか。」
神田「うん、だから、どうしよっか？あ、じゃあ志村さん俺が先に連れていこうかな。」
志村「はい。」
小幡「いえ、志村さんは私が連れていきますので先に佐伯君をお願いしていいですか？」
神田「ああ、そう？」
志村「(小幡をいぶかしげに見る。)・・・・・」
神田「じゃあ、佐伯君いこうか。」
佐伯「はい。」

佐伯、荷物をまとめて

神田「いける？　佐伯君」

佐伯「はい、いけます。神田さん、髪切りました？」
神田「切ったよ。よく気づいたね」
佐伯「いや、雰囲気違うなって思ったんで。」
神田「うれしいね。おじさんの変化に気付いてくれるなんて。」

など話しながら、神田と佐伯、下手から退場。小幡が深いため息をつく。

小幡「ねえ、そういう態度辞めてよ。」
志村「・・・・」
小幡「聞いてる？」
志村「そういう態度って？」
小幡「それよ。」
志村「よくわかんないんだけど。」
小幡「ねえ、態度を改めてくれないと。」

志村「なんで？　関わりないでしょ？」
小幡「説明したよね？　現場で言いづらいことがあったら、私に相談するよう。メールアドレスだって渡したでしょ？」
志村「あなたに相談することはない。絶対に。だから、改める必要はない。」
小幡「・・・・・」
志村「そもそも、採用されることはないんじゃなかったの？」
小幡「しょうがないでしょ。人手不足で、経験者は貴重なんだから。」
志村「さすが。嘘で人を集める会社だね。手当たり次第って感じ。」
小幡「(深呼吸して)ねえ、悪かった。あの日は言い過ぎた。」
志村「・・・・・」
小幡「嘘だってわかって、ついカッとなっちゃて。冷たい態度だったって、反省してる。」
志村「・・・・・」
小幡「ねえ、ずっとそうしてるつもり？」
志村「私の自由でしょ。」

小幡「地元トークしましょうよ。［地元が］近いんだから、同い年だし。飲み行きましょうよ。」
志村「別に。無理しなくていいけど。」
小幡「ねえ、部署は違うけど、これから同じ会社の一員になるんだから、お互い水に流しましょうよ。」
志村「・・・・・」
小幡「(志村の前までいって頭を下げる。)悪かった。この通り。」
志村「(少し心が揺れるが、反対方向を向く。)」
小幡「あなたの言うとおりだよ。うちの会社も嘘をついてるのに、あなたを責める権利はない。あなたの言う通り、私たちは人をだましてる。」
志村「・・・・・」
小幡「勤務時間帯は、あなたが希望した九時から十八時でいい。」
志村「え？」
小幡「時給も一五〇〇円スタート。」
志村「一五〇〇円？」
小幡「うん。あ、佐伯君には内緒にしてほしいだけど。」

志村「だって、そんなこと・・・」
小幡「これがあの日、あなたを侮辱した私が見せるべき誠意だと思ってる。本当に悪かった。許してほしい。」
志村「・・・わかった。ありがとう。」
小幡「うん。」
志村「私も、恥さらしとか地獄に落ちろとか言い過ぎた。ごめん、なさい。」
小幡「全然。お互い様だから。」
志村「うん。」
小幡「じゃあ、これで手打ちね。(手を差し出す。)」
志村「うん。(手を恐る恐る受け取る。)」
小幡「これから、よろしくね。」
志村「うん、よろしく。」
小幡「地元トークもしようね。」
志村「うん。したい。」
小幡「早速だけど、今日飲み行かない?」

志村「今日？　今日はちょっと、〈また来週以降に聞いてくれる？〉」
小幡「〈遮って〉じゃあ、いつならいける？いつなら空いてる？」
志村「ちょっと待ってよ。なんか、ぐいぐいじゃない？」
小幡「そう？」
志村「ちょっと、入ったばかりで余裕持ちたいから、落ち着いたら。」
小幡「いや、私とあなたは早急に仲良くなる必要がある。」
志村「ん？」
小幡「私たちは運命共同体になったのよ。」
志村「どういうこと？」
小幡「・・・あなた、面接の日の帰り覚えてる？」
志村「帰り？」
小幡「私は、あなたに履歴書を突き付けた。」
志村「そうだね。私もつい、ばって、取っちゃったけど。」
小幡「そう。私はあなたが隠していた本当の職歴が書いた履歴書を突き付けた。」
志村「そうだね・・・・ちょっと待って。」

小幡「嘘の職歴が書いてある履歴書を残して、あなたは帰ったの。」
志村「え？」
小幡「あなたの経歴は、嘘の履歴書になってるの。」
志村「ちょっと待って。つまり、この会社の人は私が一年間、正社員でコールセンターの会社にいたことがある人間だと思ってるってこと？」
小幡「そう。」
志村「・・・・・無理無理無理。」
小幡「大丈夫だよ、大丈夫。あなたの嘘は大したことないから。」
志村「いやいや。え、それで？」
小幡「なにが？」
志村「それで、私となかよくやっていきたいってこと？」
小幡「違うよ。仲良くしたいって気持ちは関係ない。同い年だし、同郷だし。」
志村「(考える人のように、顎に手を当てて)・・・やっぱり無理だよ。打ち明けよう。」
小幡「え？」
志村「だから、正直に打ち明けるの。経歴は嘘の経歴だって。」

小幡「なんで？　そんな必要ないって。せっかく採用もらったのに、だめになるかもしれないよ？」
志村「あなただって、経歴詐称するような人を雇えないって言ってたじゃない。」
小幡「だから、あれはかっとなって。よくよく考えたら、大したことないなって。」
志村「ええ。」
小幡「九か月も一年も大差ないよ。」
志村「[面接の時と]言ってることが違うじゃない。」
小幡「だって、コールセンターを九か月って続いてる方よ。アルバイトでも。もう一年って言って許されるよ。」
志村「そんな無茶苦茶な。」
小幡「志村さんさ、大した嘘ついてないんだって。他にもっといるんだから、嘘ついて入ってきた人。」
志村「例えば？」
小幡「三年間無職だったのに、正社員で働いてました、とか。アルバイト経験しかないフリーターが、ずっと社員で働いてたとか、前の会社を三か月で辞めたのに、3か月の短期契約だったとか、ほらみんな大胆に嘘ついてるよ。」

志村「その人たちは今も働いてるの？」
小幡「みんな辞めてるね。」
志村「ほら。」
小幡「あ、でも普通にコールセンターが合わなかったから、辞めたの。嘘がわかったのも、働いてる時じゃなくて、辞めた後に風の噂とかでね。」
志村「ええ。ちょっと。私嘘つくの苦手なんだけど。」
小幡「だったら、どうして嘘の履歴書を出したのよ？」
志村「それは・・・ばれないと思ったから。」
小幡「でしょ。実際ばれてない。私にしか。」
志村「そもそも、なんで小幡さんは本当のことを言わなかったのよ？」
小幡「ん？」
志村「だから、私が嘘ついてるって。これは嘘の職歴なんだって。言えば、採用されなかったでしょ？」
小幡「それはね・・・ごめん。」
志村「なによ、それ。」

小幡「あの日、すごいイライラしちゃって。もうそういう気力がなかったのよ。そしたら、コールセンター経験ある！いいじゃんいいじゃんって、神田さんと上がどんどん盛り上がって、採用になったの。でも、志村さんもう来ないだろうなと思ったら、あなた来るんだもん！」

志村「私のせいなの？」

小幡「違うよ！　これは、もうさ、事故。」

志村「事故？」

小幡「そう。事故だよ。お互いの嘘が招いたね。」

志村「・・・・・」

しばらく、沈黙

内線が鳴る。

小幡、内線に出る。

小幡「はい、お疲れ様です。神田さんですか？　今佐伯さんを現場に案内してます。

十二階にいると思いますよ。はい。はい、失礼します。(内線を切る。)」

志村「・・・この電話ってどこに通じてるの？」

小幡「上のオフィスだよ。まあ、今話してたのは私の上司。」

志村「つまり、採用を決めた人ってことだよね。」

小幡「まあ、そうだね。」

志村「・・・・・」

小幡「ん？」

志村「小幡さん、私決めたよ。」

小幡「何を？」

志村「働くよ。」

小幡「うん。全力でサポートするから。」

志村「ただし、私が働けるかどうか決めるのは上の人の判断だよ。」

小幡「どういうこと？もう、採用されてるじゃない？」

志村「そうね。今はね。(内線に手を伸ばす。)」

小幡「(思わず止める。)ちょっと何するの？」

志村「今この電話で、あなたの上司に本当のことを全部言うの。」
小幡「なんでよ？」
志村「それが正しいことだからよ。」
小幡「そんなことしなくても大丈夫だよ。」
志村「大丈夫、小幡さんには迷惑はかけないから。」
小幡「どういうこと？」
志村「あなたは知らなかったで通せばいい。」
小幡「え？」
志村「だから、嘘の経歴だって知らなかったって言えばいいでしょ？　今聞いたって。」
小幡「ちょっと待ってよ。私が自分の保身のために嘘を隠そうって言ってると思ってるわけ？」
志村「違うの？」
小幡「違うよ。私はただ、賢い方を選んでるだけだよ。お互いにとってプラスでしょ？　あなたは働ける。会社はコールセンター経験のある人材を確保できる。プラスじゃない。ね、変に波風立てなくていいじゃない？」

志村「でも、嘘は嘘だよ。」
小幡「そうだよ。でも、(言葉が続かない。)・・・ないと思うけど、採用取り消しになるかもしれないよ？　いいの？　志村さんはそれで。」
志村「構わない。私が嘘の履歴書なんか、出さなきゃよかったんだよ。もしこれで、採用取り消しなら納得できるよ。」
小幡「あなたって、本当に・・・・絶対大した問題にならない。告白するだけ無駄だよ。」
志村「なら、言っていいよね？(と内線に手を伸ばす。)」
小幡「(内線を抑える。)めんどくさいの。」
志村「めんどくさい？」
小幡「なんとなくわかるでしょ？　うちの会社が、人手が足りてないの。大した問題にはならないと思うよ。だけど、会社として経歴に嘘があるってわかったら、何もしないわけにはいかないのよ。仕事が増えるの。」
志村「具体的には？」
小幡「そうね。まず、聞き取り調査、問題が起きた原因の究明、再発防止策の提示、全体会議での共有。まあ、とにかく仕事が増えるのよ。人事部はただでさえ、

業務が追い付いてないのに、大変煩わしくなるのよ。」

志村「私の嘘のせいで、いろんな人に迷惑がかかるってことか。」

小幡「あなたのせいだけじゃないけどね。私も共犯だから。」

志村「・・・でも、私は言いたい。」

小幡「・・・・わかった。そこまで言うなら、とめない。どうぞ。」

志村「ありがとう。」

小幡「本当に私のことも言っていいからね。責任を取る覚悟はあるから。」

志村「うん。」

志村、内線の受話器に手を伸ばす。

志村「かけるよ。」

小幡「うん。」

志村、なかなかかけない。

小幡「どうしたの？」
志村「・・・・かけるよ。」
小幡「うん。」
志村「・・・・・・」
小幡「・・・え？かけないの？」

志村、小幡を見つめる。
小幡も志村を見つめ返す。

志村「かけるよ。」
小幡「聞こえてるよ、さっきから。」
志村「うん。」

小幡「うん。」
志村「・・・・・・・」
小幡「・・・・・・」
志村「・・・やっぱり、小幡さんかけてくれない？」
小幡「え？なんで？」
志村「よく考えたら、私あなたの上司は知らないし、向こうも私のことわからないじゃない？」
小幡「今日入社した志村ですって言えばわかると思うよ？」
志村「あ、そう。」
小幡「うん。」
志村「・・・でも、小幡さんから。」
小幡「なんでよ？」
志村「私からいうとややこしくならない？」
小幡「大丈夫。自分の口から言ったほうがいいって。」
志村「・・・そうだね。じゃあ、かけるよ。」

小幡「うん、どうぞ。」
志村「・・・・・・」
小幡「・・・・・ん？」

志村、内線から手を離す。
小幡と向き合う。

志村「・・・小腹が空いた。」
小幡「え？」
志村「小腹が空いたから、今日はやめとこうかな。」
小幡「・・・(噴き出してしまう。)」
志村「え？」
小幡「(笑い声が大きくなる。)」
志村「ちょっと、なによ？」

小幡「ごめん、ごめん。だって、小腹が空いたって。」
志村「しょうがないじゃない！　この後研修もあるし。」
小幡「(まだ笑ってる。)」
志村「笑いすぎでしょ！」
小幡「あなたって純粋な人だよね。」
志村「なによ？　ばかにしてるでしょ！」
小幡「してない。してない。ほめてるよ。」
志村「え？」
小幡「あなたは本当に純粋な人だと思うよ。」
志村「なんなのよ。」

志村、席に着き、ため息をつく。
佐伯、下手より入場。

佐伯「お疲れ様です。」
小幡「あ、お疲れ様です。どうでした？　上は。」
佐伯「あ、はい。いよいよって感じがしてきました。」
小幡「そうだよね。じゃあ、次は志村さんだね。」
佐伯「あ、それで、一回小幡さんだけ来てほしいそうです。」
小幡「え、なんで？」
佐伯「なんか急遽クライアントがきたから、どうのこうのって。」
小幡「あ、本当？　じゃあ、行ってくるか。」

小幡、軽く荷物をまとめてドアへ向かう。

小幡「志村さん、大丈夫だから。」
志村「・・・・・」

小幡、下手より退場。

佐伯「何がですか？」
志村「なんでもない。」

志村、席に着く。
佐伯、スマホをみて、動画を見始める。
志村、佐伯をなんとなく見る。

志村「・・・ねえ、不安とかないの？」
佐伯「え？」
志村「だって、あなたも嘘ついてるんでしょ？職歴。ここに来るまでの二年間、アルバイト転々としてたのに、一つのバイトにまとめたって言ってたよね？」
佐伯「ああ。大丈夫ですよ。別に。」

志村「なんで、そんな自信満々なの？」
佐伯「だって、ばれないですよ。どうせ。みんなやってますよ。」
志村「だからって・・・」
佐伯「密告でもない限り、ばれないですよ。」
志村「密告・・・・」
佐伯「志村さん、企業がどんな人を求めてるかわかりますか？」
志村「え？・・・優秀な人。」
佐伯「そりゃ優秀にこしたことはないですけど、違いますね。」
志村「なに？」
佐伯「辞めない人です。」
志村「辞めない人？」
佐伯「辞めずに、ずっと働いてくれる人が欲しいんですよ。特に、この会社はそうだと思いますよ。」
志村「・・・・・」
佐伯「だから、嘘をついて入ったって事実はあるけど、その代わりに働いてあげれば

いいんですよ。働いて、成果を出して、なるべく辞めない。」

志村「辞めない・・・」

佐伯「そう。そしたら、帳消しですよ。」

志村「うーん・・・」

佐伯「難しく考えすぎずに、働きましょうよ。」

志村「・・・・」

佐伯「志村さん、再スタートを切りたいんでしょ？」

志村「え？」

佐伯「履歴書の志望動機に書いてあったの見えましたよ。その気持ちも嘘なんですか？」

志村「違う。」

佐伯「だったら、再スタート切りましょうよ。望んでた形じゃなかったとしても、チャンスはつかめたんですから。」

志村「・・・・」

志村、なんとなく窓の方に行き、外を見る。
佐伯、スマホを観るのをやめて志村を見る。
そこに、神田が入ってくる。

神田「あ、志村さん。お待たせして申し訳ない。」
志村「いえ。」
神田「じゃあ、荷物まとめて上行こうか？」
志村「はい。」

志村、荷物をまとめる。
佐伯、志村と入れ替わるように窓の方へ向かう。

神田「いけるかな？」
志村「はい。って、神田さんすごい汗ですよ？」

神田「ああ、いやちょっとね、急遽クライアント来ちゃったせいで、ばたばたしちゃって。」
志村「今から行くの十二階ですよね？　私一人で行けますよ。」
神田「いやいや、それはさすがに。」
志村「いや、でも本当に汗だくですよ。全然休んでてください。」
神田「じゃあ、お言葉に甘えようかな。」
志村「はい。」
神田「上で、小幡さん待ってると思うから。」
志村「わかりました。」

志村、下手より退場。
神田と佐伯、二人きりになる。
神田は席に着いて、手で自身を仰ぐ。
佐伯は窓から遠くを見ている。

佐伯「ここ眺めいいですよね。」
神田「そう？」
佐伯「僕、高いとこ好きなんですよ。」
神田「現場の方が十二階だからもっといいと思うけど。ここは、五階だから。」
佐伯「あ、俺の家見える。」
神田「本当？」
佐伯「はい。」
神田「・・・・・」
佐伯「・・・神田さん。」
神田「ん？」
佐伯「なんで僕は採用されたんですか？」
神田「それは・・・・」
佐伯「言いましたよね？　僕嘘ついてるって。」
神田「・・・それは、俺が上に報告しなかったから。」
佐伯「なんで、そんなこと・・・」

神田「それは・・・俺らは同じだから。」
佐伯「・・・あれから、行きました？　お店。」
神田「いや、ああいうところは合わないな。」
佐伯「僕もです。」
神田「・・・佐伯君がついた嘘は大した嘘じゃないだろ？　ちょこまかした経歴をアルバイトに一つにまとめたってのは、大した嘘じゃない。」
佐伯「そっちじゃないですよ。」
神田「・・・・」
佐伯「言いましたよね？　新卒で入った会社をなんでクビになったのか。それは、大した嘘ですよ。」
神田「でも、昔のことだろ？」
佐伯「いやいや・・・。」
神田「・・・そもそもなんで、正直に打ち明けたの？」
佐伯「それは・・・・」
神田「言わなきゃばれなかったのに。」

佐伯「・・・神田さんをみたときに、感じたからです。この人には嘘をつきたくないなって。ありのままの俺を見てほしいって。」
神田「・・・・・」
佐伯「採用されるとは思わなかったな。なんで、採用したんですか？　神田さん、絶対後悔しますよ。」
神田「しないよ。」
佐伯「また同じことをやるかもしれないんですよ？」
神田「やらないよ。」
佐伯「なんで言い切れるんですか？」
神田「君がどんなに反省してるか伝わったから。それに、俺が、やらせない。」
佐伯「・・・・・まだ二回しか会ってないのに。神田さん、詐欺にあいますよ。」
神田「俺さ、結婚してるんだ。」
佐伯「はい。」
神田「そのほうが、会社でやっていくのに楽だったから。」
佐伯「まあ、そうですよね。」

神田「軽蔑するか？」

佐伯、神田の顔を見る。

佐伯「しないですよ。だって、僕らがうまく生きていくための戦略じゃないですか？」

神田「・・・・」

佐伯「普通に生きようとするだけで、嘘つくことが強要されるんですから。」

神田「いつまで続くんだろうな。」

佐伯「死ぬまでじゃないですか？」

神田「(佐伯の言葉を聞いて軽く笑う。)そうだな。」

佐伯、神田が笑ってるのを見て緊張が解けたように顔をほころばせる。

佐伯「僕らは共犯関係ですね。」
神田「そうだな。」
佐伯「今日、飲みにでも行きますか？」
神田「いいね、行くか。」
佐伯「約束ですよ。」

小幡と志村、下手より入場。
小幡の手には、ケーキ屋さんの箱。

小幡「お疲れ様です。」
神田「お。志村さん、どうだった？上は。」
志村「あ、はい。いよいよだなって。」
佐伯「僕と同じこと言ってる。」
小幡「これ、クライアントからお菓子もらったんですよ。(と言いながら、箱をデスクに置く)。」

神田「まじで？」
小幡「はい。四つあるから、私たちで食べちゃいません？(腕時計に目をやって、)もういい時間だし。」
神田「そうだね。じゃあ、佐伯君と志村さん、どうぞ。」
志村「ありがとうございます。」
佐伯「なんですか。」

小幡、箱を開ける。

佐伯「あ、プリンだ。」
志村「これ、とよんちのプリンだ。」
佐伯「有名なんですか？」
志村「うん、プリンマニアには結構有名な店みたい。」
小幡「はい、どうぞ。」

小幡、全員に配る。
神田、志村、佐伯それぞれ受け取って、プリンを食べ始める。

神田「うん。うまい。」
小幡「すっきりした甘さですね。」
神田「今度、買いにいこうかな。うちの嫁、プリン好きなんだよ。」
小幡「いいんじゃないですか。」
神田「志村さん、どこに店あるか知ってる？」
志村「この近くだと、下北ですね。」
神田「ふーん。そうなんだ。今度、帰りに嫁さんに買ってこうかな。」
志村「卵とかもあるんで、是非。」
神田「うん、ありがとう。あ、そういえばさ、現場の人、志村さんが来るのめっちゃ楽しみにしてるよ。」
志村「え。なんでですか？」

神田「だって、志村さんがコールセンター経験者、しかも正社員って聞いて、みんな超期待してるから。」
志村「ああ。」
小幡「神田さん、そんなこと言ったら、志村さんのプレッシャーになっちゃいますよ。」
神田「ええ。でもさあ。」
志村「ご期待に添えるか不安ですね。」
神田「大丈夫だよ。志村さんなら。前のとこではどんなことやってたの？」
志村「そうですね。健康食品の受注窓口を。」
神田「あ、そうなんだ。社員だとさ、やっぱり電話取るだけじゃないよね？」
小幡「神田さん、そんな色々聞いちゃ。」
志村「小幡さん、大丈夫だから」
小幡「え？」
志村「そうですね。最初は電話取るだけでしたけど、管理業務も増えてきて、新人さんの研修とか、なかなか納得されないお客様の対応とか。」
神田「クレーマーね。やっぱり、いるよね。」

志村「そうですね。やっぱり、コールセンターにつきものですから。」
神田「そうだよね。大変だよね、いやあ、志村さん入ってくれて、本当にうれしいわ。
　現場も超助かると思う。」
佐伯「え。神田さん、俺は？」
神田「佐伯君ももちろんうれしいよ。二人とも入ってくれて、助かるわ。」
志村「こちらこそ。そうだ。小幡さん、飲み、今日でもいいよ。」
小幡【このタイミングで言われたことに驚き】え？ああ、ほんと？じゃあ行きましょう。」
神田「え、なに？二人飲み行くの？」
志村「はい。私たち、地元がすごい近いんですよ。同い年だし。ね。」
小幡「うん。」
神田「へー。いいね。」
佐伯「俺らも行きますよね？」
小幡「あ、そうなんですか？」
神田「(小幡の顔を見ないようにして、)そういえば、志村さんって画家を目指してたんだっけ？」

志村「(急に振られて)え、ああ、はい。」
神田「そうなんだ。」
佐伯「あ、そうだ。志村さん、今、今ですよ。」
志村「何が？」
佐伯「志村さんの絵、見たい。」
志村「はあ？」
佐伯「同僚になったら見せてくれるって言ったじゃないですか？」
志村「なんで、描かなきゃいけないのよ。」
佐伯「ええ。」
小幡「私も見たい。」
志村「ちょっと。」
佐伯「見たいですよね？神田さんも。」
神田「うん。ここ(ホワイトボードを指して、)にでっかく描いちゃっていいよ。」
志村「いやいや、神田さんまで。描かないですから。」
佐伯「残念。」

志村「もう絵は描かないって決めてるんですよ。あ、みなさんゴミもらいますよ？」
神田「ああ、いいよ、志村さん俺捨ててきちゃうから。」
小幡「神田さん、私が。」
神田「いい、いい。俺ついでに一服してきちゃうから。」
佐伯「あ、俺も手伝いますよ。」
神田「手伝うほどでもないけど。」
佐伯「喫煙所、知りたいんで。」
神田「じゃあ、行くか。」

神田と佐伯、下手より退場。

志村「小幡さん、私再スタート切りたい。」
小幡「うん。」
志村「嘘はついたけど、再スタート切ってもいいかな？」
小幡「もちろんだよ。」

志村「うん。」

志村、まだ少し若干の迷いがあるような表情。
小幡、志村の迷いを感じ取る。

小幡「志村さん、私の話聞いてくれる？」
志村「うん。」
小幡「私さ、面接の日、あなたに嘘を打ち明けられたときにすごく怒ったじゃない？」
志村「うん。」
小幡「なんで怒ったのかなってあの後凄い考えたの。志村さんが言うように、私たちも嘘ついてるし、なんで志村さんの嘘が許せなかったのかなって。」
志村「・・・・」
小幡「最初はね、同郷だってわかったのに、裏切られたって気持ちがあったのかなって思ったんだけど。ちがうの。」
志村「なに？」

小幡「私、無意識に見下してんだよ。志村さんのことを。」
志村「・・・・」
小幡「それは志村さんだから、見下してたんじゃなくて、面接官は上、求職者は下って無意識に思い込んでたんだよ。だから、嘘が許せなくてあんな態度を取ったんだと思う。私、それに気づいたときに愕然としちゃって。そういう人間にはならないって決めてたのに。私、最悪だなって。」
志村「小幡さん。」
小幡「だからね、私志村さんに会えてよかったって思ってるんだよ。」
志村「私と？」
小幡「あなたが、あの時言い返してくれたから、気づくことができたんだよ。だから、すごく志村さんには感謝してるの。」
志村「感謝されるようなことしてないよ。」
小幡「ううん。その純粋さが私を救ってくれた。本当にありがとう。（深々とお辞儀をする。）」
志村「ちょっとやめてよ。」
小幡「志村さん、私ね、運命だと思うの。」

志村「運命？」
小幡「だって、こんなに地元が近い同い年なんてそうめったに会えないもん。これは運命としかいいようがないよ。」
志村「さっき、事故って言ってたじゃない？」
小幡「そういう面もあるよ？　でも、プラスに考えようよ。再スタートしましょう。お互いに。」
志村「・・・・・・」
小幡「私、志村さんの再スタートを応援したい。一緒に再スタートしたい。だから、働こうよ？」
志村「・・・共犯だね、私たち。嘘を隠す。」
小幡「そうだね。」
志村「・・・わかった。私、働いてみるよ。」
小幡「志村さん！」
志村「絶対に再スタート切る。その切符はまず、つかめたんだもんね。」
小幡「そうだよ、志村さん！」
志村「うん、私やるよ。」

小幡「全力でサポートするから。」
志村「よろしくね。」

小幡と志村、握手を交わす。

小幡「で、ひと段落したところで、私も一服してきていいかな？」
志村「どうぞ。」
小幡「じゃあ、また後でね。」

小幡、出ていく。
志村、なんとなく窓の方へと向かう。
窓を開けて、外の空気を吸う。

志村「私は再スタートを切る。私は再スタートを切る。私は、いった。」

突如、頭痛が志村を襲う。
痛みに顔をゆがめる。
しかし、気合で抑える。首を横に振り、痛みを振り払う。
頬を両手で二回たたき、

志村「よし！(大きく息を吸って、叫ぶ。)私はここで再スタートを切る！」

息切れをする志村。
疲労を感じているようだが、その顔には確かに希望が見える。
暗転。

【三場】

2025年8月30日金曜日午前11時過ぎ。

下手に小幡、上手に志村が座っている。
志村は書類を記入している。
小幡はパソコンを目の前に置いている。

志村「書いたよ。」
小幡「(受け取り、書類を見つめている。)・・・」
志村「書き忘れてるとこあった？」
小幡「・・・ないよ。じゃあ、最後に保険証、返却お願いしていいかな？」
志村「(鞄から、保険証を抜き取る。)はい。(渡す。)」
小幡「・・・・・」
志村「(受け取ってもらえないので)はい。」
小幡「・・・本当に辞めるの？」

志村、下を向き、静かにうなずく。

小幡「(ついため息を吐く。)本当にさ、何度も何度も、しつこくてごめんね。」
志村「・・・・・」
小幡「もったいないよ、本当に。」
志村「・・・・・」
小幡「あなたはね、優秀すぎる。応対も完璧。オペレーターの平均応対時間が三分のところ、あなたの平均は一分。マニュアルが完璧に頭に入ってるから、できる所業よ。もう現場の人間はね、マニュアルを開くよりも、あなたに聞く方が早いって言ってるよ。モンスタークレーマーに対しても全く動じない。それどころか、常連のカスハラじいさんを、ちょっと抜けてるおじいちゃんに仰天チェンジさせた。どうやったの？」
志村「たまたまできたんだよ。」
小幡「たまたまじゃできないよ。あなただから、できたんだよ。あなたにしかできないんだよ。だから、もったいないよ。なんで？」
志村「・・・・ごめんね。」
小幡「(手で頭を押さえて、呼吸を整える。)・・・例の件だよね？」
志村「・・・・・」

小幡「あなたの、望む形で再スタートを切ることができなかったってのはわかる。後ろめたい気持ちがあるのもわかる。でも、あなたが気にしてるほど大した嘘じゃないんだよ？」

志村「・・・・」

小幡「あなたの仕事の実力は、実際の経歴を上回ってるんだよ。たった、二か月でリーダー候補に名前が挙がるなんて、うちのセンター始まって以来の快挙なんだよ。誰もあなたが正社員の経験がないなんて疑ってない。志村さん、嘘を真にしたんだよ。」

志村「・・・そうじゃない。」

小幡「え？」

志村「嘘の件じゃない。」

小幡「じゃあどうして？」

志村「それは、(答えようとするが、頭痛が襲う。)いった。」

小幡「え？」

志村、あまりにも強い痛みに、机に突っ伏す。

小幡「ちょっと、大丈夫？」
志村「(痛みが走る。)」
小幡「(志村に駆け寄る。)志村さん、大丈夫？」
志村「(答えられない。)」
小幡「ちょっと、救急車呼ぶよ。」
志村「(痛みと戦いながら、)やめて。」
小幡「え？でも・・・」
志村「呼ばないで、救急車。」
小幡「なんで？　痛いんでしょ？」
志村「いいから。」
小幡「よくないよ。(スマホを取り出し、かけようとする。)」
志村「やめてって！！」
小幡「なんでよ？」
志村「もし、救急車で運ばれて、入院なんてことになったら、私生きていけない。」

小幡「でも、治さないと。(再びかけようとする。)」
志村「やめて。(小幡にしがみつく。)私、ずっと画家になるためだけに生きてきたから。貯金とかないの。入院費用なんて、払うお金ないの。」
小幡「家族とか、頼れる人は？」
志村「そんなのいない。私にはいない。私、働かなくちゃいけないの。」
小幡「じゃあ、なんでやめちゃうのよ。」
志村「わからないよ！　私にも。」
小幡「・・・・」
志村「頭痛がね、収まらないの。最初は嘘をついて入社した罪悪感からきてると思ってた。でも、違った。私が無理なことをしてるから、この頭痛はきてるの。」
小幡「無理なことって？」
志村「社会になじもうとしてるから。私はなじめない人間なんだよ。」
小幡「なじんでるよ。」
志村「なじんでなんかない！ ここにいる私は本当の私じゃない。今はまだ、現場の人は知らないだけで、本当の私を知ったら、きっと。・・・私は自分にいいところがひとつもないの。」

小幡「あるよ。さっきも言ったでしょ？　あなたは優秀だって。過小評価しすぎだよ、自分を。ねえ、自分を認めないと！　自分で認めないと！　再スタートしたいんでしょ！！」

志村「できない。」

小幡「そう思い込んでるだけだって。あなたの気持ちもわかるけど、〈まずは自分への認識を変えていかないと！〉」

志村「〈遮って〉わかるわけないでしょ！！　ずっと社会でやってこれた人に。わかるわけないんだよ！！」

小幡「・・・」

志村「私、画家になりたかったんだよ。それが自分のいいところだと思ってたから。」

小幡「・・・そうだね。私にわかるわけないよね、一か月、二か月の仲だもんね。同郷で同い年ってだけで、わかるわけないよね。」

志村「・・・・・」

小幡「ごめんね。もう、とめないよ。保険証もらうね。」

志村「・・・・・・」

小幡、書類にチェックをつける。

小幡「手続きもこれで終わり。」

志村「・・・・・・」

志村、荷物をまとめる。

小幡「最後にさ、友達として一個お願いしたいんだけどさ、いいかな？」

志村「なに？」

小幡「絵、見せてよ。」

志村「・・・・」

小幡「この紙に、ちょろっと描くだけでいいからさ、見せてよ。見たいよ。あなたの絵が。」

志村「・・・ごめん、もう描かないって決めたから。」

小幡「・・・・そっか。」

志村、荷物を持ち、席を立つ。

志村「ごめんね。」
小幡「・・・・」

佐伯、下手より入場。

小幡「佐伯くん？」
佐伯「僕も、僕も退職の手続きしてください。」
小幡「え？」
佐伯「もうやめますから。どれですか？　どの書類書けばいいんですか？(小幡の手元に合った書類を無茶苦茶にあさり始める。)」
小幡「ちょっと。」

志村「佐伯君、どうしたの？落ち着きなよ。」

佐伯、急にやめて窓の方に向かっていく。
小幡と志村、顔を見合わせる。

志村「佐伯君？」

神田、下手より入場。

神田「はじめ。」
佐伯「来るなよ！」
神田「誤解なんだ、話を聞いてくれ。」

神田、佐伯のもとへ向かおうとする。
それに気づいた佐伯が、窓に足をかける。

神田「おい！」
志村「佐伯君！」
佐伯「こっち来たら、飛び降りますよ。」
神田「何、馬鹿なこと言ってるんだよ！！」
佐伯「馬鹿なことじゃない！　もう僕の人生は終わりだ！」
神田「はじめ！　落ち着けよ！」
佐伯「落ち着けるかよ！　僕を裏切ったくせに！」
神田「だから、俺じゃないんだって。」
佐伯「嘘だ。僕がうっとうしくなって、暴露したんだ。信じてたのに。」
神田「うっとうしく思うわけないだろ！　お前のこと。」
佐伯「じゃあ、今言えますか？僕らの関係を。この二人の前で！　言えるんですか！」
神田「それは・・・・」

佐伯「ほら。」
神田「俺の気持ちもわかってくれよ。」
佐伯「なんで、いつもはぐらかすんですか？　二人で居酒屋行っても、カフェに行っても、映画に行っても、僕のこと好きだって一度も認めてくれないじゃないですか。」
神田「言えるわけないだろ？　だって、俺は・・・・怖いんだよ。」
佐伯「僕ばっかり苦しいじゃないですか。僕ばっかり、好きって伝えて。」
神田「悪かったよ。認めたら、何かが変わっちゃいそうで、怖かったんだよ。」
佐伯「・・・だから、終わりにしたかったんですね。」
神田「それは違うよ！　誤解だよ！　はじめの過去のことは、一言も言ってない！　匿名でタレコミがあったんだよ！　俺じゃない！」
佐伯「こんなタイミングで信じられるかよ！　昨日の今日で、グッドタイミングすぎるだろ！　俺は、あんたを信じて全部打ち明けたのに。結局あんたも横領した人間としか見ない。」
小幡「横領？」
佐伯「(小幡を見て)僕ね、新卒で入った会社で、会社から預かったお金でパチスロや

ったんですよ。それで、懲戒処分うけてクビになったの。それ隠して、この会社に入ったの！なんか悪い！？」

小幡「・・・・・」

神田「はじめ、落ち着いてくれ。なんとかするから、俺が。」

佐伯「なんとかってなんですか？　もうなんともならないよ。もう告知義務違反も重なって、もうどこ行ってもやっていけない。だから、もう終わりだよ。」

神田「まだ決まってない！」

佐伯「もう決まりましたよ！　神田さん。みんな、もう僕を嘘つきとしかみない。横領した過去のある人間としか見ない。どんなに反省したって、もうしないって心に誓っても、誰も信じてくれない。」

神田「・・・・」

佐伯「負け犬の遠吠えだけどさ、そんなに大事かな？　過去に何したとか、何してたとか、働きたいでいいじゃんかよ。嘘ついたって、働けるならいいじゃんかよ。」

神田「はじめ」

佐伯「それが、遺言でーす。（身体を乗り出す。）」

志村「だめ。」

神田「はじめ、やめてくれ！」

佐伯、動きを止める。

神田「俺お前と出会えて、初めて本当の自分を認められたよ。俺、お前がいないとダメなんだ。お前がいないとダメなんだよ。はじめ。」

佐伯「神田さん・・・もう遅いです。」

神田「はじめ！！」

小幡「いいよ、飛び降りなよ！」

志村「小幡さん？」

神田「何言ってるんだよ！」

小幡「でも、たぶんだけどこの高さじゃ死なないよ。」

佐伯「・・・・(小幡を見る。)」

小幡、佐伯のとこまで近寄る。

小幡「(下を見て、)うん。この高さじゃ、死なないよ。頭から落ちれば死ぬと思うよ？　工夫しないと。」

佐伯「・・・・・」

小幡「飛び降りの成功率ってかなり低いんだよ。知ってる？　失敗したら、今普通にできてることが自力でできなくなるよ。歩くのも、呼吸するのも、ご飯食べるのも。そして、なんで飛び降りたんだろうって思いながら、生きていくことになるよ？　その覚悟があるなら、どうぞ。」

佐伯、下を見て動きを止める。

小幡、デスクに置いてあるパソコンを操作して、佐伯のもとに持っていく。

小幡「(佐伯に画面を見せながら、)匿名でタレコミがあったってのは、事実みたいだけど。」

佐伯、しばらく葛藤したのち、降りてくる。
神田、佐伯のもとに近寄る。

佐伯「神田さん。」
神田「(抱きしめて)馬鹿野郎。この、馬鹿野郎。」
志村「・・・・・・」
小幡「さっきの話、わかるな。」
志村「え？」
小幡「なんで、働くってシンプルじゃないんだろう？」
志村「・・・・・・」
小幡「私はこの仕事を通してたくさんの人に嘘をついた。いろんな人が嘘をつくのも見てきた。採用されたいから嘘をついた人も見てきた。そういう環境にいるからかな。私もあなたに言われるまで、嘘をつくことに大きな疑問を感じなかった。働きたいから働く。でだめなのかな。働いてもらいたいから、働いてもら

う。じゃだめなのかな。なんでシンプルじゃないんだろう。(笑って)シンプルじゃダメな理由もわかるんだけどさ。・・・志村さん、私はあなたの言うように地獄に落ちると思うよ。これからも嘘をつき続けるから。自分がこんな大人になるなんて、太田にいたときは思いもしなかったよ。本当に、太田の恥さらしだね。」

志村「小幡さん。」

小幡「もう帰って大丈夫。あなたに会えてよかったよ。さようなら。」

志村「・・・・・・」

志村、小幡に背を向けドアノブに手をかける。
しかし、手はいつまでも動かない。

小幡「志村さん？」

志村、振り返り、ホワイトボードまで歩いていく。
荷物を放り投げ、羽織っていたジャケットを投げ捨てる。

志村「ひまわりの絵をかきます。」
小幡「え？」
志村「八月も終わりだけど、まだまだ暑いから、ひまわりの絵をかきます。」
小幡「志村さん？」
志村「見たがってたでしょ？　私の絵を。佐伯君も、神田さんも。見せてあげる。」
小幡「でも、ここには赤のマーカーしかないよ？」
志村「あるもので、表現するのが創作だから。」
小幡「・・・・・」
志村「ほら、みんな座って。今日は特別に描く過程を見せてあげる。」

志村、ホワイトボードに絵を描き始める。
小幡、佐伯、神田、なんとなく座る。

志村、絵をかきながら笑いだす。

小幡「・・・・・」

志村「あ、ごめんね、楽しくて。もう描かないって決めたのに、やっぱり楽しい。」

小幡「・・・・・・」

志村「私が画家を目指したのはね、私にもできることがあるって思ったからなんだよね。それに、絵は発見できるから。一枚の絵を見て、無限の解釈ができる。きれいも、汚いも、怖いも、嫌だも人それぞれ違うものを発見する。それぞれが感じたものが正解なの。シンプルだよ。」

小幡「・・・・・・」

志村「現実は複雑だから。みんな、シンプルじゃいられなくなるでしょ。そういう人たちに届ける仕事がしたかったんだよね。」

小幡「・・・・いいね、それ。」

志村、絵を描き続ける。

小幡、佐伯、神田、志村の絵が完成するのを待ち続ける。
徐々に暗転。
終わり。